

## いのち生きゆく

無実ながら三十余年も刑死と向かい合っていた免田栄めんださかえさんは、現代最大の受難者であろう。その救援運動の中心人物として熊本市の潮谷総一郎しほたにそういちろう氏（慈愛園総長）があげられている。氏とは私もおつきあいがあるが、日本の福祉界での評価は高い。

潮谷氏と免田さんとはそうした福祉施設関係でのつながりと思っていたが、そうではなかった。潮谷氏はある死刑囚の姉に懇願されて、弟死刑囚をしばしば獄舎に訪ね、信仰の道を説いていた。ある日、弟と姉から「絶対にやっつけないと何十年も言い続けている死刑囚がいる。会って下さい」と、熱心に頼まれる。それが免田、潮谷両氏の出会いのきっかけであった。

すでに刑場に消えた弟とその姉の悲しい心が、偉大な救援事業の端緒たんちよであったのである。人生の感動的な場面を出会い、触れ合いという。しかし、それは選ばれた人びとの間でも、普通の人たちの大まじめな日常生活の中でこそよりしばしば生ずるもののようなものだ。

もう一人の死刑囚が、いま、さやかに思い浮かぶ。十数年前刑死した獄中歌人島秋人のことが。彼は生まれた瞬間から酷薄な運命に投ぜられ、青年期に強盗し騒がれて殺人をしてしまう。中学の教師たちからは、「鉄鋌てつびょうの多き靴にて蹴られたる憶おもひが愛しあまりに遠く」と、ふり返り詠よんでいるほど虐待され続けた。

しかし、一度だけほめてくれた先生がいた。それを思い出して先生に手紙を書く。それがきっかけに先生夫妻の愛に深く導かれ、模範囚となり、初めての作歌活動にも入る。「ほめられし一つのこのうれしかりいのち愛しむ夜のおもひに」―かすかなえにし、見事な出会い。いのちはかくも麗うらわしい。

「七年の毎日歌壇の投稿も最後となりて礼深く詠む」―刑死永訣えいげつの朝、端正な毛筆で記し留めていた。

(一九八三年九月十九日)